

氏 名：伊富貴 初 美

学 位 の 種 類：博士（看護学）

報 告 番 号：甲第108号

学 位 記 番 号：博第105号

学位授与年月日：令和4年9月20日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：退院支援における専門職種間連携の変化のプロセス：

Relational Coordination 理論を基盤としたアクションリサーチ

The Process of Changes in Interprofessional Work in Hospital Discharge Support:

Action Research Based on Relational Coordination Theory

論 文 審 査 員：主査 江 本 リ ナ

副査 川 原 由佳里（正研究指導教員）

副査 安 部 陽 子（副研究指導教員）

副査 太 田 喜久子

副査 藤 川 あ や

論文審査の結果の要旨

審査の概要

高齢少子社会における患者家族の複雑なニーズに応じ、地域包括ケアを推進するという今日的な課題を背景に、本研究では、退院支援における専門職種間連携を促進するプロセスを明らかにする目的でアクションリサーチが実施された。

結果では、患者・家族12事例へのそれぞれの退院支援の実際と、これに同時並行して生じた専門職種の連携の変化が豊富なデータのもとに描かれた。研究開始時に比べて、専門職種間で患者や家族のニーズに焦点化した目標が共有されるようになり、活発なコミュニケーションが行われ、ときに自らの役割を超え、患者・家族のニーズに柔軟かつ迅速に対応するなどの連携の変化がみられた。組織においてもこの変化を取り込もうとする動きがみられ、退院支援を受ける側である患者や家族においても様々な不安を抱きつつも専門職の支援を得て、自宅や療養先での生活に向けて心身の両面で準備をしていく様子がみられた。

これらの変化をもたらした理由として、本研究では先行研究で退院支援への効果が示唆されていた多職種でのミーティングや、専門職間の相互理解と信頼を促進するためのポジティブフィードバック、また研究参加者の主体的な取り組みを促すための振り返りやセンスメイキングなどを組み込むなど、緻密な計画がなされていたこと、研究フィールドからも十分な協力を得ることができたことがあげられる。

論文では、研究フィールドとなった施設の特性や、その特性をふまえて計画を実施していったプロセスが明確に記載されている。またデータ収集が専門職と患者・家族との面談場面だけでなく、面談に参加した専門職や一部の患者・家族に対するインタビュー、コアメンバーのミーティング、管理者へのインタビューなど多面的に行われており、豊富なデータに基づいて結果が導かれている点も評価された。

本研究では、専門職種間連携を促進するうえでのRC理論の効果が示された。この研究をふまえ、実践の質を高めるための組織変革を効果的に推進するには、組織の特性の把握とともにその特性に応じた形で組織を変革していくための知識や理論が不可欠であるとの示唆が述べられている。今後さまざまな場において看護実践の質を高めるうえで、理論と実践と研究を結びつけるアクションリサーチの可能性を示すものとなったという点でも評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。